



発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第四十一号 (一日発行)
平成五年二月一日

古平風土物語

(六)

ウインチ設置と共六に
鯨は去っていった

高橋 源 五口

大時化による人身事故や、鯨の損失は、鯨の陸揚げ作業がすべて人力に頼るしかなく、非能率的であったことがその原因でもあった。

鯨を積んで陸に着いたサンパ船から、もっこをせおって鯨を陸に揚げるのだが、人手がかかり過ぎ、いったん時化になるとせつかくの鯨を海に捨てることになる。陸に揚げてはじめて漁獲したことになるのである。

大正の末ごろから昭和の初期にかけて、大きな漁場では、鯨の陸揚げにウインチ(捲揚機)を設置して使うようになった。このウインチによって、サンパ船からすぐに大きな網もついで揚げ、それをトロッコに積んで廊下(倉庫)に運べるようになった。

った。能率を高めることによって、時化による損失をうんと少なくすることが出来るようになった。こうしたことから、施設の整備と改善を図る漁場が次第に多くなっていったのである。

昔も今も自然の災害は恐ろしいが、昔はこれに加えて伝染病があり特に天然痘は恐れられた。たとえ治ったとしても顔の肉がくずれ、「ボロクソ」とよばれた。

今から百四十年程も前のこと、道南のある村では、一村約百五十人の内四十人余りが死亡し、アイヌの人たちは

青森から古平へ

天然痘猛威

医師が来町

古平町内では、仲谷(沢江村)・種田(入船町)・山口(入船町)・田岸(沖村)・渡辺(群来村)・八反田(沖村)など多くの鯨建場を持っていたり、漁の良かった親方(大漁業者)が積極的であった。また、積丹方面でも次第にこのような設備をする漁場が多くなったと聞いている。

× × ×

積丹半島の鯨漁場跡の海岸には、六十年後の今もなお、こうした設備や施設の跡(船入潤、矢来、ウインチの土台など)を見ることが出来る。鯨漁が盛んであったころの面影がしのばれる懐かしい遺跡である。

顔に鍋のすみを塗って山中に避難したというし、その後十四、五年の間に三千人も死亡している。

明治になって、開拓使は子どもの種痘をすることを規則で定め、当時、根強よかった種痘への迷信を無くし、その偏見を改めることに努めた。

また、天然痘の予防と

発生した時の処置などについても細かに示したほか、「くだらない噂を信じて種痘を拒んだりする者は、きつとり調べの上相当の処分をする。」という罰則も出した。

話し代わって昨年秋。ふとしたことから青森県風間浦村の教育委員長さんと知り合い、「下北の歴史と文化を語る会」の会誌が送られてきました。その中に三上敏さんという人の一文が載っていて、村で医者をしていた六代の当主であった三上庸達が、明治四年五月十六日から北海道の西海岸を約四か月間巡回して、七百七十人の子どもたちに種痘をしたということが、その時の日記と共に紹介されました。そしてその中には、古平にも滞在したことが書かれています。

九月三日 古平ニテ
一金一分 髪結賃
九月十一日
一同式分 三郎内定吉より謝礼 同
一同二分 饒別能とや定吉より
九月十三日
一二分札 拾両内金預り
米松より横や江
(原文のまま)

たかが スキー

さねと スキー

いつか——どこかで——お礼を言われることがある。

「うちの孫がスキーに乗れるようになった」とか、「おらいのチャッケ（小さい子）、おかげでスキーがうまくなった」とか。

そういわれてもこっちはもう全然覚えていないけど——。

「むこう様は知ってるのかなあ？」

名前も聞かず「うんうん、そ

故郷を想う 福井孝平

れは良かったネ」とかいってみたりするが、後で「ああ！あの泣いてばかりいた子どもだった」と、ふっと思い出すことともあるが、いくつになってもひと様にお礼を言われると悪い気はしないものである。

子どもたちから懐かしそうに「スキーの先生！」などと挨拶されると、頭の一つもなでてあげるようにしている。

さて古平のスキー学校も今年で開講して四年になる。受講生も数多く盛況で、何とも嬉しいかぎりである。くちコミのせい

か、特に今年は有料のスキー学校が一月中で千人をこえし、教育委員会と地元スキー連盟主催の無料講習会も五百人をこえたようだ。このあと、二月、三月中までにはまだまだ増えることだろう。地元スキー連盟の若手の指導員も動員されて、一生懸命がんばってくれている。ありがたいたいことだ。目下のところ事故もゼロで、安全には注意を重ねて精いっぱい努力し指導を

している。

今年の傾向として、幼稚園の園児や小学校低学年の初歩者、初級者が増えてきて、大変喜ばしいことだと思っている。またスキー場も年々整備され感謝している。

将来、ロッジなども冬期宿泊が出来て、格安の三平汁でも食べられる配慮が必要か。もっともっと楽しめる施設の利用方法

が可能かと思う。

理想は高く、古平の町おこしも考え、さらに楽しい企画を立てて、大いに、一村一品運動として発展出来れば……。

郷土の 説 伝

おとこ石・おんな石

真 貝 亮 子

浜町と新地を結ぶ港町。人家が途切れて、今は釣り船がつかわれている港に下りていくところの山肌に、ドーンとくっついて並んでいる大きな石がある。

ハンサムな、姿のいい黒つぼいのがおとこ石。子持ち石でザラザラ肌で、おとこ石の倍もあるのがおんな石。おんな石と同じ質の小さな石が二つの石の真ん中にチョココンと座っている。

まるで三人家族のようで、昼はほほえましく思ったものだ。夜ともなれば、人家から遠く離れた細い道のこのあたりには、裸電球が一つだけポツンとついていた。

ご祝儀によばれていっぱい機嫌の男の人が、ご馳走の包みと羽織紋付きを海辺の石の上に置

なにくそ、できるよ！

× ×
リフトからスキーする児が声をかけ
すけそ船航跡引いて戻り来る

いて、「ああいい湯加減だ、いい湯加減だ」と、ジャブジャブお風呂へ入っているつもりで冬の海に入っていたんだと。

これは寒い夜、いろりやこたつに入って、ばばちゃんたちがつづれを刺しながら、子どもたちにも幾度ともなく話して聞かせる夜話だった。

夜、受験の勉強を終えて九時ごろここを通る時は、神経がピリピリ、身体はコチコチ、「絶対化かされないぞ、ぜったい化かされないぞ。」と、念仏を唱えるように自分に言い聞かせながら、後をも見ずに小走りに通ったものである。

「その石、今もあるの？」
「あるわよ！ フェンスの外をのぞいてごらん！」

町民への娯楽と町政刷新へ

尾山 清

■素人のどど

白目慢十八八云

推進同志会は町民注目の的となり、何かにつけて同志会というように頼られる同志会に育っていききました。しかし、こうなると辛いもので、何か常に行動を起こしていいないと町民にも申し訳ないような立場になり、こうして考えたのが「素人のどど慢大会」でした。

新地町の劇場を借り受け、四十人の出場者に七人の審査員、最後の人が歌え終わるのに何時間かかったのか記憶にありませんが、最後まで盛大な拍手で沸き返りました。これは当時としては最高の娯楽であり、明日への糧でもありました。

■町民候補を擁立

選挙戦へ

ちようどそのころ古平町の町長選挙があり、同志会員の中から「旧態依然とした町政から脱皮するために、清水先生を擁立して選挙戦を——」というこ

とで同志の意見が一致し、清水先生から了解を得ました。

選挙戦の相手は地元の大沢吉三郎氏と、当時、古平中学校長の田中潜氏だったように思います。後援会組織も無く、経験も無く、金も無く、一見無謀とも思われる選挙戦でしたが、町政に新しい流れを望む若き血潮の

燃え上がるのを阻止することは出来ませんでした。

作戦らしい作戦も無く、ただただ町政の革新を訴え続け、寝食も忘れるほどの運動を展開しました。

しかし如何せん、ついに壁を打ち破ることは出来ませんでした。我々の完全な敗戦でした。だが選挙戦を振り返って、この時ほど同志会員の団結力を頼もしく感じたことはありませんでした。

× × ×
そのほかにも、まだまだ取り

組んだ行事はたくさんあったと思いますが、今、そのすべてを思い出すには余りにも歳月が過ぎました。

しかし、この短い手記の中から、当時の古平推進同志会の活動の一端をしるのんでいただければ幸いです。

(尾山さんは七十五才で、現在札幌市にお住いです。次回、最終回になります)



水見悠々子 寿男父子句碑

昭和59年5月27日

古平ホトトギス会

父子共にホトトギス同人として俳句を愛好し、数多くの句作に努め、昭和五十八年、珍しい親子句集として『海幸山幸』を出版しましたが、間もなく悠々子は長逝されました。

没後、長く俳句の指導を受けていた古平ホトトギス会の有志が、長男・寿男氏がホトトギス同人になったのを機に、父子句碑の建設を家族に図ったところ、実は悠々子には、生前から父子句碑を建てたいとの意向があったことが伝えられ、あまり例を見ない父子句碑が建てられることになりました。

句碑を建てるのなら——と、現在地の土地の提供者も現れたということが、当時の新聞にも報道されました。

濱篝たちまち並び

練群来

悠々子

雪降って雪止んで

街美しく

寿男



も高い評価を受けておりました。

については、「水見さんの

二十世紀初めの《古平郡》

——沿革——（続き）

その後は海岸を埋め立てたり丸山の崖下をひらいて家を建設し、ミミタレ（現在の港町）、イペシルン（不明）では海岸に漁家が立ち並び、ようやく浜町と入船町が連絡する道路も出来た。

明治の初めころ、トットロ、ウタノコロ、チョペタンの区域を濱中村、イペシルン、ミミタレを垂見村と改めた。

同四年、開拓使出張所を濱中村に置いたが、このころから住民が著しく増加してきた。ベンザイ泊を入船町と改め、同七年ここに郵便局を置いた。同九年には、新地町の地を漁業者から返上させ、これを商業希望者に分け与え商店を開かせた。

当時、高野某、梅野某が呉服反物、小間物類の店を開店し、その他小売商が相次いで開業し、当地の中心となっている。同十二年、垂見村を港町と改め、新地・入船の二町を割いて丸山町

とした。また、濱中村を浜町と改めた。

同十三年には郡役所を置き、また、戸長役場を設け、毎年住民も増え、海岸通りには人家が多く建ち、浜町には裏通りが出来た。

同十八、九年になると農民も原野に定住し、ようやく開墾が

〔△7日はこんなん日〕

戦争激化で衣料品も切符制

継ぎはぎだらけの衣服で生活

〔昭和17年〕

戦争を進めるために必要な物資を確保するのに、国は「物資動員計画」というものを樹て、衣料品も公平な配給をするということ、切符制になった。一月二十日、衣料切符制が発令になり、繊維製品の販売や移動が禁止され、二月一日からこれが実施されることになった。そのため町内の呉服店では、十日

進んだ。

鯨漁は二万石余り、約二二万一千円の漁獲があったが、昔に比べて次第に衰退の傾向にあるようだ。近年、鱈漁が次第に盛んになり、棒鱈、塩鱈に加工され、薬用として鱈肝油（八百五十斤＝五百ぎ）が生産されている。また小樽地方で雑魚の需要が増え、そのため、従来は捨ててかえりみられなかった魚類にも販路がひらかれ、小漁民の移住する者が多くなってきたことから、商業も盛んになってきた。

二十六、七ころ稲倉石に鉦山がひらかれ、坑夫二百人以上も使って一時盛大に金・銀を採鉱し、これに要する物資の輸送や供給を当地に求めたので大いに商業も活発になったが、三十一年より休業したため多少の影響を受け、現在のところ市況はやや不振になっている。

ぽうとした問屋街の主人と店員が、法律に違反したということで検挙されるというニュースが報道された。

戦争が激しくなるにつれてこの衣料品の点数も上り、翌年には背広六十三点・ツーピース三十六点・運動用パンツ八点などとなった。

しかし、衣料品が切符で買える内はまだ良かったが、やがて切符はあっても品物が無いという時代になった。

何回も補修した子どもたちの衣服などには、色とりどりの布がはりつけられていた。

現代のファッションは衣服が有り余ってか、わざと破いて当て布をしたものを身につけるようだが、そのルーツはあの戦時中にあった！

「歴史はくり返す」か——。